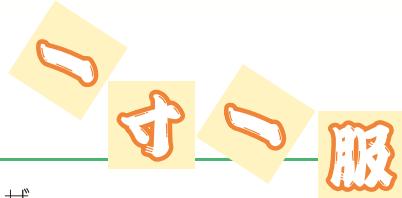


ちょっと不思議な縁



まちづくりアドバイザー

小野島 清高

平成14年春、公園のパトロールに出かけたところ「トイレで人の気配がありますが、どうも変です」という報告を受け、急ぎ現場へ向かった。ノックを繰り返したが全く反応はなかった。そこで身軽な部下を担ぎ上げ覗かせたところ「女の人が倒れています！」と叫んだ。中に降りてドアを開けるよう指示したが「内開きで、どうしても開けられません」という返事が帰ってきた。数分後、要請した救急隊員が強引にこじ開けたところ、意識不明の上、百キロ超級の女性だったため四人掛かりでようやく救出した。これは森田泰弘君と訪れた県営長良公園での出来事であり、二人の初仕事でもあった。

転勤してしばらくすると、この森田君が岐阜県を退職し、大手建設コンサルタントへ転職するという話が聞こえてきた。温厚で誠実な人柄は、誰からも好かれ、仕事ぶりも極めて優秀だったことから公園行政には不可欠な人材であった。このため先輩や同僚たちと慰留を続け、人事担当まで提出されていた辞表を取り下げさせてしまった。しかし、転職の真意がどこにあったのか、ということについては十分把握できていなかつたのだった。

平成24年3月、突然、訃報が届いた。享年38歳。お見舞いすら行けず大変申し訝なく、とても残念だった。葬儀場に入ると、たくさんの絵画と表彰状そして感謝状などの遺品が美しく展示されていた。私たちが全く知らないところで趣味を通し、名古屋の友人たちと幅広く活躍していたことに気付かされた。入選した絵画をチャリティーに出品し、その売上金一部を社会福祉団体へ寄付していたという。また、メモ帳の表紙に使用されたり、さらにはカレンダーにも掲載されたりして、多くの方々に愛用されていたと聞いたのだった。

一見、何気ない風景画のようではあったが、やさしいタッチで道路には電柱が建ち、電線が張り巡らされている絵が数多くあった。これを眺めていた時、研修旅行先で「僕は道路の景観設計がしたいのです」とキッパリと言ったことを思い出し、ドキッとした。さぞかし都市景観を損ねている電柱や電線が気がかりだったのだろう。思い起こすと、彼はシビックデザインの生みの親である中村良夫先生に師事し、現在東京大学景観研究室の中井祐教授と一緒に学んでいた。だから、道路や公園づくりなどを通し美しい景観形成を図りたいという強い思いがあつたに違いないと感じた。転職したいという彼を、強く引き留めて良かったのだろうか。職場で生かされていたのだろうか。そして将来に対する希望は見えていたのだろうか、というモヤモヤした気持ちが残ってしまった。偶然ではあるが、二人の先生方には景観アドバイザーとして、また鵜飼い大橋の景観設計において平成4年ころより縁をいただいていた。

後日、友人たちによって名古屋と東京において、それぞれ遺作展が開催され多くの人に惜しまれた。これも彼の人柄によるところが大きいのだろう。もちろん岐阜県庁の仲間たちも休日を利用して遺稿集の編集と出版に尽力したのだった。

初盆を迎える頃、森田君のお父様から食事のお誘いがあり、仲間たちとともに親しく懇談する機会を得た。ずっとモヤモヤしていた気持ちを正直に伝えたところ、「そのようなお話を、息

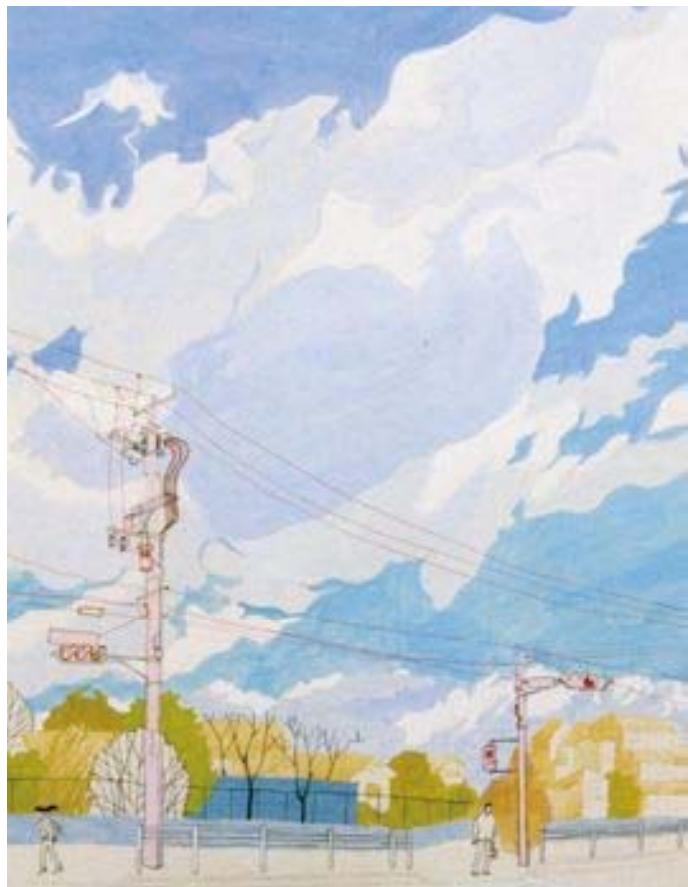
子からも聞いておりましたので・・・。全く気にしておりませんから・・・」と温かい言葉をいただき、気が少し楽になった。

宴が盛り上がったころ、お父様が「そういえば、息子が在職中、私と妻を一度だけ花フェスタ記念公園に連れて行ってくれました。おそらく自分が関わった仕事を見て欲しいと思ったのでは・・・・」と少し嬉しそうに話されたことが印象的だった。振り返ると、平成17年に開催された花フェスタ2005のメインテーマ館“花のミュージアム”では、展示計画がなかなか進まず時間との戦いに苦労していた。さらに、園内の回遊性を高める“薔薇回廊”的企画設計も同様だったが、熱心に取り組み完成させた在りし日の姿を懐かしく思い出したのだった。

今年の夏も、この集まりが岐阜市内で開催された。その折、お父様は、宮城県七ヶ宿の白炭工房（偶然にも高校の先輩）の炭で出来上がった和紙墨のお洒落な“四明はがき掛け”を用意され、これを参加者全員にプレゼントされた。

いつもすばらしい心遣いをいただき、そして、まちづくりに携わる若い人たちを温かく見守っているようだった。だからこそ森田君の志を大切にしてほしいと願っている。人は生まれ変わると言われるが、ひとり一人の心の中に今も生き続けているようだった。

この不思議な縁がいつまで続くか分からないが、とりあえず来年はご夫妻に岐阜へ来ていただき、養老公園内にある荒川修作が設計したテーマパーク“養老天命反転地”と、花フェスタ記念公園内の想い出の施設をゆっくりと案内することになっている。



モリタヤスヒロ「すれ違い」